



文学教材研究における観点のもち方

山梨学院短期大学講師 松野 洋人
まつの ひろと

よい授業を生み出すための準備作業として教材研究が重要であることは、だれもが認識していることですが、ではどのような観点到立って教材を研究したらよいのでしょうか。今回は文学教材に絞って教材研究の観点について考えてみたいと思います。

1 前提として ―「作品研究」ではなく「教材研究」―

まず留意すべきは、「作品」研究ではなく、「教材」研究だということ。教材の研究は、当然のことながら授業を念頭に行われるわけですから、それは「目標」や「生徒(学習者)の実態」を踏まえたものでなければなりません。授業における失敗の多くは、実は生徒の実態把握が十分でなかったり、教材研究が生徒の実態とかけ離れていたりしたために起こっていることが多いのです。

それから、新出漢字、難語句、作品の時代背景、作者などについては、文種に関係なく共通の研究事項として確認しておかなければ

なりません。ただし、研究は十分にしても、授業でどこまで踏み込むかは、授業時数と生徒の実態次第です。

2 感動を高めるための仕掛け

生活における読みにおいて感動はゴールですが、授業における読みにおいては、感動はスタートです。その文章を読んで、読者である「わたし」はなぜ感動したのか。その理由を確認するために表現を吟味することが、読みの大事な作業です。

例えば、「一年生に『さつき』という教材があります。この教材を読んで、わたしたちが最も感動させられるのは、主人公「惇」の父親が岩場で滑落し、極めて危険な状況にありながら無事生還できたことであり、そこに生まれる「惇」の喜びや安堵感は、「惇」に寄り添って読み進めてきた読者のものでもあるのです。

しかし、この喜び(感動)は、生還に至る過程に、「惇」の心に「不

安」や「焦り」や「恐怖」を生み出させた数々の仕掛けが存在したからこそ増幅して読者の心に迫るのです。その仕掛けをしっかりと整理し確認することが、『さつき』の教材研究では重要なことです。

もう一例紹介しましょう。同じ二年生の教材に『大人になれなかった弟たちに……』があります。太平洋戦争中、生まれて間もない弟が栄養失調で死ぬという出来事を中心に、母の苦労や「僕」の思いが綴られた悲しい内容の話です。

そして、その「悲しさ」こそがこの教材の感動性です。しかし、出来事の内容だけが読者の心を揺さぶる要因ではありません。この教材では「文体」に着目させたいのです。悲劇的な状況を取り上げながら、文章は感情を抑えた淡々とした表現になっています。しかも、全体的にセンテンスが短く、簡潔な文体にもなっています。このような文体上の特色が、読者の心に登場人物の悲しみを深く染み込ませる効果を上げているのです。この教材では、文体の研究を外すことはできません。

3 心情の表れ方

登場人物の心情把握は、文学の読みの授業において最も日常的かつ普遍的な学習です。心情とは、喜怒哀楽などを中心に、心にあらる感情をいうのですが、文学においては、通常それらは、「嬉しい」「悲しい」「楽しい」などという直接的な表現では表しません。では、人物の心情はどのように表されているのでしょうか。

二年生の教材『字のないはがき』で確認してみましよう。この教材における読み取りの中心の二つは、「私」や末の妹に対する父の心情ですが、当然のことながら、「不安」「つらい」「悲しい」といった心情を直接説明する文言は出てきません。心情は、「私」への手紙の

文字や文言、末の妹に対する行為の中に込められているのです。

三年生の教材『温かいスープ』に登場する、パリのレストランの母娘の「私」、すなわち筆者に対する心情も、直接には何も表現されていませんが、「二人分のパン」を黙って添える行為や、余ってしまったからと言って「湯気の立つスープ」を差し出す行為の中にはっきりと読み取ることができるのです。その母娘に対する「私の心情も、「涙がスープの中に落ちるのを気取られぬよう、「さじ」さじかむようにして味わ」う行為の中に集約されているのです。

このように、登場人物の心情は、その人物の言動や行動に表れることが一般的なのです。心情を精査する重要な観点です。

4 古典へのアプローチ

古典を読む目的が、昔の人のものの見方や考え方、思いなどにふれることだけならば、口語訳した文章を読めば事足りる。しかし、言語の教育としての古典学習であるならば、文語表現を味わうという点が大事になります。歴史的仮名遣いの読みや、古語の意味を確認することは、教材研究の必須事項ですが、最も重視したいのは文章のリズムです。

二年生の『扇の的』を例にとれば、次のような点を確認することができます。第一に、部分的に五音・七音、またはその変形音数で表現されている。第二に、対句表現が多用されている。第三に、促音表現が多い。

教材が変われば別の要素も加わるでしょうが、このように文体上の特色を踏まえ、文章のリズムを意識させることが重要です。しかもそれは十分な音読によって、生徒に体感させる必要があり、そういう意味では、教師もまた十分な音読研究が必要となるのです。